



草加八潮地域連携呼吸器研究会 (SYRC-R:シルク・アール)

事務局：草加八潮医師会

〒340-0018 草加市中央1-5-22
TEL 048-928-8760
FAX 048-924-7180

代表世話人・会計：高木 寛
(高木クリニック)

世話人：加藤 貴紀
(かとうファミリークリニック)
平田 大介
(草加八潮医師会学術担当理事・平田クリニック)
篠原 浩一
(八潮中央総合病院)

広報・編集：新 謙一
(草加内科呼吸ケアクリニック・前東京医科歯科大学臨床教授)

看護・介護部門世話人
花木 美穂子
(わーくわっく草加)
須嶋 義夫
(一正堂薬局第二支店)
内田 由美子
(ケアステーションかしの木)
高橋 克幸
(獨協医科大学越谷病院リハビリテーション部)
新 智美
(草加内科呼吸ケアクリニック)

監査・斉藤 清
(草加八潮医師会)
会報著作・製作：新 謙一

SYRC-Rは草加八潮の周辺地域からのご参加も歓迎致します

篠原浩一先生（八潮中央総合病院診療部長・緩和ケア医）に当会の世話人になっていただきました。



第9回の当会で聖路加国際病院緩和ケア科のチーフドクター林章敏先生を招いてパネルディスカッションをした際にパネラーをお勤め頂きました篠原浩一先生に当会の世話人になってもらいました。篠原先生は林先生の高校の先輩で、当会世話人平田先生（平田CL）の出身の自治医大の先輩でもあります。今回の大震災では自治医大OBとして被災地の医療ボランティアに2度も参加され、地域医療を日頃から考えておられる先生です。皆様、宜しくお願いします。

シルク・アール：質の高い滑らかな地域連携に！

草加八潮地域連携呼吸器研究会（英名：Soka-Yashio Regional Conference of Respiratory Disease）は頭文字をとりSYRC-Rと表記し、「シルク・アール」と発音します。絹（シルク）の様に質の高い滑らかな連携がある（アール）ことを目指しての語呂合わせのネーミングです。名前負けしないように継続発展させていきたいと考えています。皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

はまぎく(浜菊)



東北の太平洋岸の海辺に秋に咲く花言葉は「逆境に立ち向かう」

編集後記

今回は高木寛先生の受賞という当会にとっても大変嬉しい出来事を皆さんと共有できて良かったです。一方、東日本大震災という戦後最大の災害では、以前より地域連携プロジェクトで交流していた石巻赤十字病院と地域の皆さんが、被災した自分より地域全体の医療を優先して3月11日以降今もなお医療者としての誇りを胸に頑張っておられることに心からの敬意を送りたいと思います。

発災直後の医療は数々報道されましたが、その後の慢性期の取り組みこそが大変重要で困難なもので、今まさに逆境に立ち向かい東北の方たちは努力をされています。皆さんは今回の生の声を聞いていかがでしたか？

顔の見える関係は、地域での絆を強くします。絆が強ければ来るべき困難に英知を結集でき、コミュニティを壊さずに私達の生活を保つことができるはずです。これからもお互いの絆、Networkを大切にしていきましょう（謙）。

草加八潮地域連携呼吸器研究会（SYRC-R）

お互いの顔が見える地域連携に

ハイライト：

当会代表世話人の高木寛先生が「秩父宮妃記念結核予防功労賞」を受賞されました。評価項目には当会の地域連携活動も含まれており大変喜ばしい限りです。今回は未曾有の大災害になった東日本大震災で中核医療機能を全うし全国から注目された石巻赤十字病院より講師をお招きしました。震災で傷んだ地域医療に今も奮闘している現場の声を伺い、私達も30年以内に予想される震災に備え、教訓として何を学ぶか一緒に考えていきましょう。

目次：

高木寛先生が第14回秩父宮妃記念結核予防功労賞を受賞 p1

講演：東日本大震災
石巻赤十字病院 矢内勝部
長、高橋純子看護副部長ほか p2

パネルディスカッション
「我々が今回の震災で得た教訓は何か」 p3

「防ぎえる要介護者」を減らすためにNetwork centric operationが非常時の要であり、日常診療でも常に意識を p3

第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会にて、ワークショップ「COPDの早期発見・早期治療を目指して」にて新謙一が、日本医師会理事今村聡先生らと共に発表 p3

当会代表世話人の高木寛先生(高木CL)が「秩父宮妃記念結核予防功労賞」を受賞

当会の代表世話人を務めて頂いている高木クリニックの高木寛先生が第14回秩父宮妃記念結核予防功労賞の事業功労賞を受賞され、10月18日にリーガロイヤルホテルにて秋篠宮妃殿下より表彰されました。以下は結核予防会の機関誌「複十字」からの転載です。

秩父宮妃記念結核予防功労賞は、平成7年8月25日逝去されました秩父宮妃殿下のご遺言に基づき、財団法人結核予防会（当時）に賜りましたご遺贈金を原資として、結核予防に大きな功績のあった方々、あるいは団体を顕彰し、もって結核予防の一層の推進を図るとともに、半世紀以上にわたり結核予防会総裁をつとめられた妃殿下のご遺志にお応えし、その御名を永く留めようとするものです。

結核予防会では昭和24年の第1回から第48回まで、結核予防全国大会式典の際に165人、24団体を「結核予防功労者」として表彰してまいりました。この秩父宮妃記念結核予防功労賞は、この結核予防功労者の制度をさらに発展させ、スケールを大きくしたもので、賞の種類も増やし、授賞対象も世界にまで広げております。

高木先生の紹介文は以下の通りです。

昭和52年東京慈恵会医科大学を卒業後、同大学病院第4内科に勤務し、その間に自治医科大学呼吸器内科および英国ロンドン大学ハーマスミス病院呼吸器科に留学した。昭和63年より東京慈恵会医科大学柏病院へ移籍し、内科講師を経て平成6年11月より高木クリニック（平成7年高木外科内科から名称変更）を開設している。

現在まで千葉県柏保健所、埼玉県草加保健所、越谷保健所の結核診査協議会委員および委員長を通算15年、草加保健所の結核相談（予防医務）嘱託医を11年務め、結核予防および結核医療の適正化に取り組んでいる。

また、学校医の活動を基に平成15年から草加市立小中学校結核対策委員会会長として結核に関する知識の啓蒙に努められている。

草加八潮医師会では、草加市胸部（肺がん・結核）健診を担当し、草加八潮地域連携呼吸器研究会の代表世話人として呼吸器疾患全般の知識の普及、病診連携に貢献している。

この様な大変名誉な表彰を受けた高木先生、本当におめでとうございます。

後列一番左が高木先生、
医師で最も若い受賞者でした。
中央は秋篠宮妃紀子様



特集： 東日本大震災

HOT事業者の緊急時・災害時対応と今後の対策

(株)帝人在宅医療 仙台営業所 東堂 健司 氏

東日本大震災における患者ケアの実践と課題

石巻赤十字病院 看護副部長 高橋 純子 先生

東日本大震災における診療の実際と課題

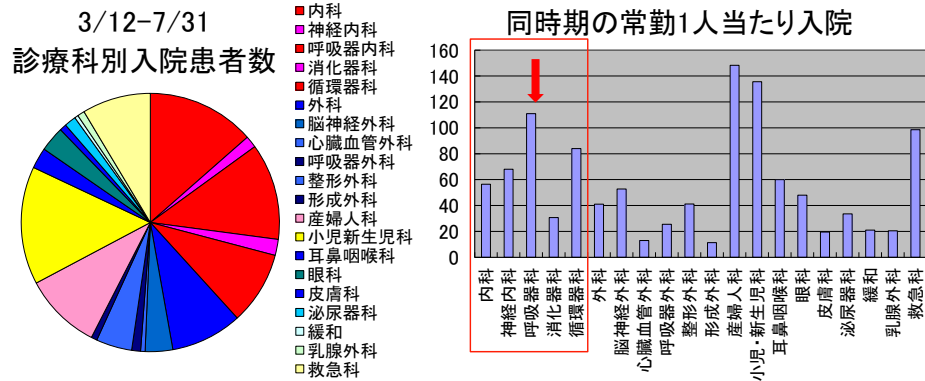
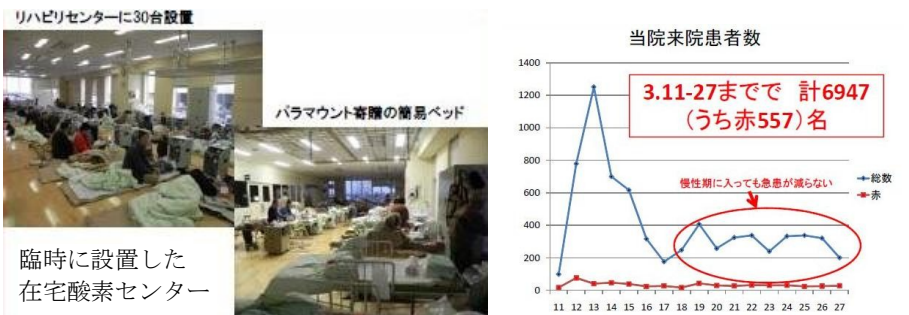
石巻赤十字病院 呼吸器内科部長 矢内 勝 先生



COPD地域連携で交流がある
石巻赤十字病院の生の声を
是非皆さんに届けたい

石巻赤十字病院はSYRC-Rとコンセプトを共有するCOPD地域連携組織のICON（アイコン）の中核病院です。水産関連産業が主力の地域性は高い喫煙率でも特徴付けられ、石巻日赤の取り組みは、未成年の防煙教育もこなしながら着実に連携症例数を重ねてきました。3月6日に東京で矢内先生とお目にかかって5日後の3月11日、大地震と津波を想定して2008年に海沿いの地域から内陸寄りに新築移転して防災機能を高めた石巻赤十字病院の底力が発揮されたのは、設備面だけでなく日頃から訓練していたスタッフの職業意識の高さによるところが大きかったと言えるでしょう。

震災直後の対応は重要、慢性期の内科系患者の増加も非常時の地域医療に負荷をかける



円グラフの赤系の部分が内科系診療科。常勤医師一人当たりでみると呼吸器内科は非常に多忙だったが組織的な応援が乏しく大変なご苦労があった様子。



パネルディスカッション ～我々が今回の震災で得た教訓は何か～

地震を想定して内陸に新築移転し災害対策トレーニングをしていた石巻赤十字病院と虚構の安全神話を言ううちにリスク回避を怠り全電源停止から最悪の事故を起こした原発。2つの組織を対比すると実際に内部の人間一人一人が自分で考えて行動しているかどうか大きな分かれ目になったのではないのでしょうか？

私達も30年以内に直下型震災があることを前提に備えなければなりません。首都圏が被災した時のインパクトは大きすぎるので形ばかりのマニュアルで済ませて成り行きに任せるのか、電気や流通が途絶えた時から救援が届いて生活が落ち着くまでのフェーズに応じた対応を今から考え、可能なことから実践するのか。今、私達が試されています。フローアからの積極的な参加をお願いします。

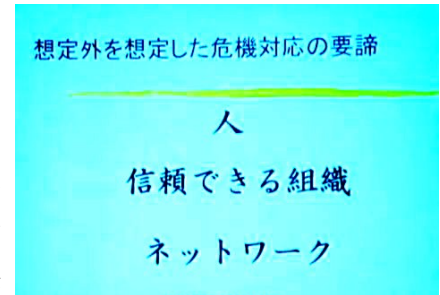
パネラーは、講演の矢内（やない）勝先生、高橋純子先生、東堂健司氏、SYRC-Rから実地医家の加藤貴紀先生、薬剤師でケアマネの須鴨義夫氏、訪問看護師内田由美子氏、訪問&通所介護事業者の花木美穂子氏。司会は自治医大OBの被災地ボランティアを2度経験した篠原浩一先生と石巻赤十字のスタッフと交流がある新智美です。総括は新謙一が担当します。

話題提供:「防ぎえる死」→「防ぎえる要介護者」を減らす

Network centric operationが要になる ～それぞれの職種が連携してベストの役割を果たす～

当地域をカバーする三次医療機関であり災害拠点病院である獨協医科大学越谷病院救命救急科池上敬一教授のコーディネートで「さいたま救急医療を考える会」が先日11月8日に行われました。ここでは主に発災直後の急性期の医療をDMATと現地中核病院の立場から議論されました。ここで、想定外危機に対応する要件として、宮城県災害医療コーディネータで気仙沼市立病院脳神経外科成田徳雄先生は、外傷が少なかった今回の災害では、「防ぎえる死」より「防ぎえる要介護者」を減らす視点でベクトルを統一して医療

を統括したこと、行政機能も低下した現地ではNetwork centric operationが要であったことを述べられました。成田先生はNetwork centric operationを「1. 目標に向かいNetworkを形成しながら、Networkを中心に、柔軟に、迅速に対応するチーム医療 2. 各プラットフォーム間に従属関係なし 3. 次世代型チーム医療」と定義されました。「人」「信頼できる組織」「ネットワーク」が有効に機能するよう日常診療から培われるべきものであり、次の災害に備える上でも重要と締めくくられました。



YouTube で「さいたま救急医療を考える会」で検索すると視聴できます。

第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 in 松本(2011年11月)

COPD早期発見管理にCOPD連携パス活用と専門医の役割について提言

本学会は、医師、看護師、リハセラピストなど多職種が呼吸ケアを「1. 目標に向かいNetworkを形成しながら、Networkを中心に、柔軟に、迅速に対応するチーム医療 2. 各プラットフォーム間に従属関係なし 3. 次世代型チーム医療」を考える会です。私達はCOPD患者さん一人一人を中心に据えて柔軟に患者ケアを考え幅広い地域医療介護関係者の中から臨機応変にチームを作り患者さんをサポートしてきました。

ワークショップ「COPDの早期発見・早期治療を目指して」が行われ、日本医師会の理事今村聡先生、日本呼吸器学会の木村弘教授と共に地域医師会所属の立場から新謙一が発表し、SYRC-Rの取り組みを紹介し、地域医療の能力から考えるとCOPD地域連携パスを今年養成が始まったばかりの慢性呼吸器疾患認定看護師のマネジメントで全国で稼働することが有用であり、そのために呼吸器専門医のサポートは欠かせないと提言しました。

